

【嘉数高台の戦闘②】

私の戦争体験

M・S（大正十四年生）

嘉数戦線は、四月初旬から戦闘がはじまって、（私が負傷したのは十九日でしたから…）四月二十三日頃まで約三週間そこで持ちこたえたはずです。嘉数の小さい丘の綾線一帯でもって。それから浦添村の前田に攻め込まれて、そして首里へと戦場は移ったわけです。

嘉数のわれわれの兵力は、一個連隊ですから、約千名でした。それだけの軍隊が四月下旬にそこから後退するときには、おそらく一割残っていたかどうか。普通、連隊副官というのは、優秀な中尉か大尉がしますが、そうした将校はほとんど戦死してしまって、士官候補の軍曹が連隊副官をしていたほどです。それから推しても、どれほどすごい戦闘だったか。

われわれは機関銃隊でしたが、一小隊に（二銃）で、一個中隊に（八銃）でした。それだけしかない機関銃に、弾薬は十箱しかありませんでした。三月二十二、三日頃から本格的な空襲がはじまったその時点で、それだけの弾薬を配給されたもんだから、「これじゃあ戦争はできない」と非常に不安でした。

しかしいざ戦闘がはじまってみたら、またそれだけの弾薬も使えないんです。というのは、米軍とわが軍の火力の差があまりにも大きすぎるんですね。われわれが陣地から、一連が三十発の二連、つまり六十発くらい撃ち出すと、二、三分待たないで、米軍はすぐ迫撃砲をあげるんです。

普通の戦闘では目標が幾らとか距離の想定をして弾を撃つはずですが、それが沖縄戦の場合は、事情がちがうんです。米軍は、弾のおちる真上にいるんですからね。上空では、グラマンとセスナが意のま

まに飛び通しで、制空権は完全に握っているんですね。だから彼らは弾の落ちるのを見ながら無電でどんどん知らせて、的確な弾着でばんばん攻撃できるわけです。こちらは射撃どころじゃないんですよ。また、たとえば歩兵砲でも一発撃つと、もうこっちも陣地はめっちゃめっちゃに根こそぎやられてしまう。だから、撃つときはよほどの効果を狙ってでないと撃てない。そういうわけで、機関銃の弾薬は一箱しかあてがわれなかったけれど、撃つ機会がなかったのです。

そこで後からは、銃撃戦ではどうにも立ち打ちできないということになって、作戦が変えられ、それから肉迫戦をやったんです。

米軍の攻撃は、時間でやっていて、朝五時から始まり、終わるのは夕方七時頃で、その頃さあツとひいてしまうんですよ。実際の米軍の部隊は、野嵩、普天間、石平、北谷付近においてあって、そこから嘉数戦線の日本軍に向かって接近してきて、攻撃をはじめ、夕方になると後退する。だからわが方も、昼は嘉数戦線で敵の攻撃に応戦し、夜になると陣地の中から這い出る。夜はこちらの攻撃の番というあんばいで、二キロ、三キロと北方へ進み出て、米軍の露営を逆襲する。そういう作戦を繰り返したのです。

米軍の周辺には、電線がはりめぐらされてあって。夜襲するときそれが難関でした。それにふれて感電するものもいて、また感付かれると、すぐに猛攻撃を受けますから、相手に打撃をあたえ得ないことが悩みの種でした。しかしなんとしても相手に攻撃をあたえなければならぬので、夜襲はずっと続けられました。暗闇の畑の中から進んで、米軍の近くで分散して隠れ、合図と同時に敵のいくつかの天幕めがけて手榴弾を投げつける。するとすぐ米軍の盲撃ちの反撃に合うのです。

毎夜、十人くらいの斬り込み隊を編成して出していましたが、帰ってくるものは一人か三人でした。出かけるときには、恩賜の煙草や少しのお菓子を湯でといてそれで水盃をして別れていましたね。私は中隊本部と連隊本部との連絡員でしたから、その頃の夜襲には参加せずにすみましたが、戦果報告はいつも聞いていました。

夜襲で米軍にも多少の被害をあたえるけれど、こっちは死者が続出して、兵力がどんどん減少するので、これじゃあいカンというわけで考えられたのがタコ壺です。

タコ壺と称する一人用の穴は、攻めてくる敵を奇襲するための、極めて簡単な堅穴で、その中に坐るとちょうど頭が出るほどの深さです。われわれは夜間にタコ壺を掘る作業をしましたが、もう敵の攻撃を防御することに重点がおかれていました。

タコ壺は陣地の周囲や、前方の、敵が通ってきそうな甘藷畑の中などに掘って擬装しておくのです。そして一人づつ斬り込み隊をその中に忍びこませるわけですが、これはもう人間魚雷と同じですね。ダイナマイト十個くらいを箱に詰めた急造爆雷と手榴弾とをかかえて敵がやってくるのをその中で待ち構え、敵の戦車がすぐ目の前まで来たとき、捨て身で爆弾箱を投げつけるのです。それはせいぜい五、六メートルのところへ落ちて、二、三秒で爆発しますから、こっちの命が助かることはほとんどなかったですな。一方、米軍の戦車は、この戦法で相当やられたようです。夜間に負傷者を救助にでかけたとき、われわれの部隊がやつつけた米軍の戦車が、嘉数の前や下の大謝名付近に十七台ほどひっくり返っていましたね。そこで米軍も作戦を変えました。

普通、戦車の後に歩兵がつかますが、あとからは歩兵を一応前進させてから、戦車部隊がきよったです。タコ壺を掃討してからある地点で戦車を待ち、そして歩兵は戦車と一緒になって攻撃していましたね。その頃からタコ壺作戦も効果がなくなっていました。

タコ壺の中の斬り込み隊は、発見されたが最後、戦果をあげることにも逃げることもできず、芋刺し同様にやられるわけですが、それでも場所を変えて、タコ壺を掘る作業はつづけていました。結局、米軍をこさせないようにして持ちこたえるための唯一の防御法だったわけですね。ま、非常に苦しい時間かせぎですな。

この最悪の状況でわれわれが考えたことは死ぬことでした。「死ぬ

ことはこれはもう免れられないんじゃないか」と覚悟していましたから、どうせ死ぬなら一発で急所をやられて死にたいと、そういう心境でしたね。腹部等を負傷した人を見ると、ほんとに気の毒でした。一日か二日は生きているんですが、もがき苦しんでから、必ず死ぬわけですから、園上われわれも死を約束されているようなもんでしたから。四月の中旬からは、こちらの方々の陣地という陣地は、昼間、米軍の馬乗りには逢っていました。その馬乗り攻撃でさんざん苦しめられましたね。陣地の入口や銃眼のところから、米軍は何時間も待ち構え通しですよ。入口や銃眼から射撃されても、地下陣地の中は曲がりくねっていますから、奥にかくれているものはそれほど被害はなかったですが。

ところがあとになって米軍は、ガソリンを入口から流し込んで、火焰放射器で中を燃やすんですね。中はもうもともとのすごい煙が一杯になって、われわれは窒息寸前になったものです。さいわい米軍は一時引き揚げたので助かったものの、それで次からは、われわれは水を準備して置いてタオルをぬらしてガスマスクの代用にしたりして応急処置を考え、頑張ったんです。苦しまぎれに表へ一步でも出たら即死です。しかし米軍は午前中にやってきて正午頃には煙幕をまいて一旦退却するんです。そこでわれわれはその後すぐに入口に飛び出して息を吹き返すというやり方に対応していましたね。また二時か三時頃に米軍は馬乗りにやってきますが、われわれは陣地の奥深くにじっとしていました。……その繰り返しです。

煙幕はものすごいもので、山や谷間ぜんたいに煙がおおわれるんですね。嘉数一带は大きな松が繁っていたところですが、煙がはれかかると、あたりは草木が砲撃でぜんぶ吹きとばされて、一本の木どころか緑が全く見当たりませんでした。われわれが匍匐して下の方まで偵察に行ったとき、いたるところ土や石が掘り起こされ、地形が変り、一面真っ白になっていましたね。

上陸では依然として敵機が飛び交っていました。面白いことには、

アメリカの飛行機の接触事故が頻繁にあったことです。グラマンは戦闘機で、セスナは偵察機ですが、ちょうど山の斜面を両側から超低空でとんできて、見ている間に接触事故をおこすんですね。するとたいいセスナは一度にばらばらになってしまい、グラマンは火を吹き出します。そんなときパラシュートで米兵が降りてくるんです。われわれは小銃や機関銃で狙い撃ちして、完全にのぼしよったですな。降りるまで生かしては置かなかったですね。

しかしこんな戦い方ではどうにもならないと、われわれは思っていました。ただ、まだ二十歳の若さであり、軍隊教育が身に沁みているから、別に負けるという意識はなかったですね。おそらく斬り込み隊でも負ける心境で行ったんじゃないかなっただろうと、思います。だから沖縄戦にのぞんだ時点においての、兵隊の心境は、嘉数戦線とそのあとでは、雲泥の差があったんじゃないかと、そんなふうに思っています。嘉数戦線では、まだ敗北的ではなく、その激戦が物語るように、米軍にも多大の被害をあたえ、沖縄戦の中で最も戦闘的だったのですから。

四月も下旬にさしかかる頃になると、米軍は勇敢にも夜襲をこころみるようになっていました。私は夜間、陣地の前方のタコ壺に、内地の召集兵と一緒に歩哨として派遣されていました。二人は離れて別々のタコ壺に立っていたんですが、ちょうど夜明け頃になって集中砲撃がなりやんだとき、ヒャーガアラ（比屋川）という前の掘り割りあたりで。急に何かがさつと物音がしたような気がしたんです。もう一人に訊いてみたら、いや気のせいだよと言われて、そうかなあとその方を見詰めていると人影が見えるんですね。三百メートル離れた掘り割りは陣地の側面で目の届かないところです。そこで私は「誰何」をしようとしたんです。すると、一人だと思ったら二、三十人がぞろぞろうつと駆け登ってくるんですね。あつ米軍だと悟ったとき、ちょうどもう一人の歩哨は「もう交替時間だろう」と言いながら私の傍まできているんですよ。私はとっさに彼をタコ壺に引きずり込んで、二人は

狭い中に嵌りこむようにしてじっとしていました。

間もなく、われわれは部隊の陣地は馬乗りにされました。二人は午前中、身じろぎもせずそのままこ壺の中にひそんでいました。距離にして七、八十メートルの所です。正午頃になって、米軍は煙幕を張って退却しましたが、そのためにこっちも発見されずにすみました。

それから午後三時すぎに、私は再び陣地の入口近くで立哨することになりました。もう一人は体格のいい古年兵には頭が上がらないので、彼のいうなりに、私は前方のタコ壺の中に立ち、彼は草で擬装された廂のある壕入口に立っていました。そのうち突然、迫撃砲の集中攻撃を受けました。私は戸板やら土やらをかぶっていました。後でおし上げて戻ってみたら、古年兵は直撃を受けて即死しているんですね。その頭がまるで小学生のように小さいんです。不思議に思って、その死体を引き起こしたら、後頭部は骨も何もかもふっとんでいて、頭が前半分しかなく、顔の皮が縮んでいたんですね。

こうして私は二度命拾いをしたのですが、夜になって、負傷したのです。四月十九日でした。そのころすでに兵隊は半分以上戦死していましたから、とうとう私にも斬り込みの命令がありました。手榴弾をもって陣地から出て、百五十メートルほど行ったとき迫撃砲を受けたのです。集中攻撃がはじまったとき伏せればよかったものの、走り出したもんだから、タコ壺まで行かないうちに、瞬間あっしまったと思ったとき右足にショックを感じて倒れてしまいました。至近弾の破片でやられたわけですが、何か大きな石をぶつけられた感じでしたね。さわってみたら、自分の足がぶくぶくしていて大きいんですね。私は膝だとばかり思ってたんですが、実際は大腿部から一ぺんに骨も肉もちぎれて、右足は背中の下敷きになっていたんです。痛みも感じないで大腿部をさかんにさわって、「ああここは膝小僧じゃあないんだなあ」と悟ったわけです。幸いにも陣地に近かったもんだから、誰かが連絡してくれて、三十分ほどして衛生兵が助けにきました。わたしの右足はわずかな肉と皮でくつついてそのままじゃ運びにくい。それ

で衛生兵は薪でも割るように短剣で私の片足を斬り捨てて、私を引きずって運んでくれたのです。

それから中隊療養所で出血の応急手当を受けて、すぐに当山の旅団病院にさがりました。そこは壕の中央を通路にして、両側に三段に寝かされました。足の痛みは何も感じませんでした。その夜、私は下の負傷者から突かれて、「お前は小便しているのか」と言われたんです。自分では何も感じないので、おかしいと思いながら衛生兵を呼んで貰いました。衛生兵が灯りを持ってきてみたら、出血がはじまっていたんですね。板切れで作った台に毛布を敷いてあるだけだから、下にいる者は生ぬるいものが落ちるんで、小便だと思ったんでしょう。

衛生兵はヨードチンキの原液を持ってきてそれを傷口につけてくれました。つまり血管を焼いて血止めしたんですね。その手当を日に二、三回受けました。それからそこで私は太腿部の手術を受けました。その手術は残酷なもので、麻酔を全くかけないで、傷口を切って揃えるのです。肉を切られるときひどく傷むのです。骨を切るときは音がいやなだけで痛みは感じませんでした。肉を切り、骨を鋸で切ってから、また肉を切るんですが、私は苦しみもがいて悲鳴をあげました。そのたびに衛生兵は、気合いを入れて私の顔を力まかせに殴るんです。またそんな気合いを入れないと私は持たなかったのかもしれないですね。

四月二十五日、六日に、私は首里の平良の師団病院に移されました。そこで前田戦線からきた負傷者の口から、嘉数戦線のその後のことを聞きました。すでに嘉数戦線は全滅状態になって前田に後退してきていること、軍曹が連隊副官までしていること。また、前田では作戦上の失敗があったことです。いためつけられて生き残った石部隊と、こちらから行った山部隊とが、朝の五時に交替する時点で、折しも米軍から集中攻撃を受けてしまったんですね。だから石部隊は壕から出ようとしても出られず、山部隊は野ざらしのまま攻撃をあびて、相当の犠牲者を出してしまったんですね。

首里の平良の師団病院には約三週間滞在していました。そこでの負傷者は皆、素っ裸でした。それを当時も十六、七歳の女学生が看病していました。相手は重傷患者だし、身動きはできないし、食事やら排便やら、傷の手当やらするので、大変だったでしょう。

負傷者の服は、手当をするとき、どこであろうがすぐ鉢を入れて切り裂いていたし、着替えるわけじゃなし、シラミも多かったので裸にした方が便利だったのですね。

しかし日に日に負傷者は増えてくるし、砲弾はどんどん周囲にとんできるとですね。――前田戦線、棚原戦線がどうにも持ちそうにないという状態になったとき、われわれ負傷者は夜間に、南風原の陸軍病院に移されました。ところが、そこは満員でみんな収容できず、大里村高宮城という部落の分院に運ばれたのです。

運ばれるとき、負傷者は仰向けに暗の上空だけを見たまます。動きはできないし、どこに向って進んでいるのか方向感覚は全くないし、なんとも不安な心境ですな。そのもつとイヤな思いをしたのは、砲弾がとんでくるときです。担いでいる人達は、タンカをその場に放り投げて、逃げるんですよ。それも当然だし、また死んで貰っては困るわけですが、あの場所の心境はなんとも淋しいものでしたね。それが首里から南風原をこえて大里の高宮城まで行く間に、何回もあったんですよ。

分院についたのは五月十四日、五日だったと思います。壕は三つからなっていて奥の方でつながっているということ、食糧も十分あるということでした。そこでの生活は、十日間ぐらいはまだ平穩無事でした。戦闘は運玉森付近だということでした。患者たちは、まだ夢みないな希望を持っていて、与那原の海にいまに友軍の病院船が来て、それで内地まで行けるんだというようなことを話し合ったりしていました。

ところが五月二十七日の海軍記念日に、米軍が与那原から上陸したという情報が入ったのです。前田も運玉森も落ちて、安謝、那覇あた

りからも上陸して、首里は四方から包囲されたんですね。間もなく首里も日本軍が撤退する直前、小名原から上陸した米軍は、大里の山頂まできて、首里に向ってさかんに砲撃しはじめた。われわれの分院壕の上に米軍はきている。発砲するとき激しく響いてくるんです。それで分院もいよいよ危険だということで、翌二十八日、退却することになりました。ところが足をやられたりしていて動けない重傷患者は残されることになったのです。看護婦やら軍医やら辛うじて歩けるような患者たちまでみんな逃げるように立ち去って行ったのです。

壕内に寝かされたまま残されたわれわれは約三十名くらいでした。老年の軍医は穏やかにわれわれに訓示しました。あとでトラックを準備して迎えにくるから、ながくても二、三日だから、それまで辛抱して待っているように、と。そのときはカンメンポを一人に二袋づつ手渡しされました。それは二日分の食糧という意味なので、われわれは分院長の言葉を信じたのです。なんとかして救いにくるだろうという期待があつたんですよ。二日間で、カンメンポは食いつくして、三日目からは何も食わずに待っていました。ところが三日たつても迎えにこない、四日たつても来ない。壕の上の山では、米軍がさかんに砲撃している。壕の中まで地響きがひびくんです。もうそこは米軍の包囲陣地になっているらしいんですね。

この状況ではとうてい連れ出しにはもう来ないだろう、もうわれわれは捨てられたんだと、寝たまま身動きできないわれわれは、そういう諦めの気持ちになっていました。

その頃、雨が降っていました。誰か壕から這い出して雨中へ出て行った者がいました。われわれは誰一人も動けません。昼も夜も何もしないで寝たきりです。傷口は放ったらかしなのでウジがわいて腐れて行くんですね。それより苦しいのは、空腹で、痛いくらいにひもじくてたまらないこと。壕の奥の方には、糧秣があることはみんな判っているんです。けれども誰もそれを取りに行ける人がいないんですね。「奥には米があるんだがなあ」と。それから水が欲しくてたまらない。

壕のずっと先の入口の方には、まるく白い昼の光がひかっついて、そっちの方から雨が流れる水の音が聞こえるんですね。ところが水を汲みに行ける人もまたいない。普通、戦場で飲まず食わずといっても、わずかでも水を飲んだり砂糖キビをとときにはかじったりして、何か少しは口にいられている筈ですが、しかしわれわれの場合には、一滴の水も飲めなかったですね。

ずっと完全絶食です。それでもときどき互に声をかけて話し合ったりしていました。とりとめのない四方山話ですがね。もし生きのびられたら、家に帰ってどうしようという話やら、内地の自分の郷里のことや家族のことなど。ま、助からない病人たちが閉じ込められているようなもんですね。

その頃、壕から這い出て行った者が戻って来たんです。彼はひどく衰弱した声で言っていました。「は、南風原は、みんな殺されたらしいなあ」と。毒殺のことです。それからというもの、みんなは非常に憤慨しました。「向こうは殺ったというのに、われわれはこうして捨てられて……納得できない、なぜ院長は殺ってくれなかったのか」と。われわれは毒殺されたかったので、口惜しかったです。

南風原の陸軍病院では、退却するときには重病人は毒殺したんですね。あれはおそらく病人も希望していたでしょうね。どうせ先の見込みはないから、帝国軍人の身をあたたら敵にまかせるよりは云々といった気持ちでしょう。われわれも同様に、自決したい心境になっていたんですな。だからわれわれは分院の院長に対し憎しみの感情さえ抱きました。

聞くところによると、われわれの分院にもそういう命令が出ていたそうです。しかしわれわれの院長は、何もしなかった。私はこのことについて後でこんなふうに考えました。分院の院長は、白髪もまじった少佐軍医でしたが、職業軍医じゃなしに、応召軍医だったにちがいありません。いわばパリパリの若い軍医だったらすぐやった筈なのに、彼には住民の医療生活を重視する考えが身についていて、決断がつか

なかっただろう思います。どうせ死ぬんだから、無理して注射することとは忍びないと。——そういう院長だったために、われわれは毒殺をまぬがれたのです。

しかしわれわれは、そこから救出されるまで院長を憎みつづけました。われわれの体は日に日にやせて、衰弱していきました。一週間くらしたらもう何も欲しくなくなっていました。私も太腿部は、腕くらいの大きさになっていて、ほんとに骨と皮という感触でした。それでもときどき誰にともなく話しかけていました。名前を呼び合うときもあるけれど、互に顔はわからないのです。皆、夜そこへ入ってきているんですから。声だけで相手が判るようになり、昼夜区別なく、互に確認し合ったりしていました。

カンメンボがなくなってから四、五日は、腹部が痛いくらいひもじくてたまらなかったですね。ところが一週間くらいしたら、なんにも感じなくなっていました。もう空腹感はないのです。全く骨と皮でしたが、それでも私たちは、話だけはしていました。

六月十日頃から、口数が少なくなり、起こしても起きない者がでてきました。壕から一度這い出た男が、最初に永眠したようですね。「ああもう逝ったんだな」と、そして次々と死んでいくのが判るんですね。「おい、彼を起こしてみてくれ」「まだ大丈夫か」と、互に毎日生きていることを確認し合うのですよ。そのうち死体が腐って、非常に臭いのです。しかしその臭いも二、三日したら感じなくなってきました。困ったことは、上の段の死人が腐敗して行くとき、その屍体から汁が私の上にぼたりぼたり落ちてくるんですね。私の手は辛うじて動かせるけれども、脚の方は、硬直してしまい、動かなくなっていて、身をずらせることもできませんでした。

私は不意に目覚めるのですが、非常に眠くって睡魔に勝てませんでした。日に五、六回は目が覚めるのですが、意識朦朧としていて話しながらも眠ってしまうんですね。そしてだんだん覚めるのが少なくなつて、一日に一度が二度ちよつと目が覚めるていどになっていました。

六月十八日の昼、誰かに揺り動かされて、ふと目が覚めたとき、顔は懐中電灯がてらされていた。人声がすぐ傍で聞こえ、通訳が何か説明しているようでした。その時、米軍に発見されたことを知ったのです。

そしてすぐタンカで壕から運びだされました。そのとき私ははつきり見たんですが、驚いたことに死人は完全に白骨になっていましたね。頭部の毛は少し残っていたんですが、骨から肉はそげおちで何一つ残っていませんでした。

この約二十日間で、壕の中に捨てられていた三十名のうち、七名が生き残ったのです。壕の外に、生存者を並べて寝かされたとき、私は見るも憐れな同類をはじめで見ました。じつに意外だったのは、田中という人でした。その人はおやまみたいな声の持ち主で、和らかい綺麗な言葉づかいをする一風変わった人でしたが、見たらなんと七名の中で一番ごつい感じの馬みたいな長顔だったです。「ああ、あんたが田中さんだったのか」と、みんな驚いていましたね。みんな骨と皮だけの裸で、髪と鬚はぼうぼうして、目はへこんでいて、互によくもまあいきていたと見合いました。あと一日、三日も発見が遅れていたら、私は生きては還れなかったと思いますよ。（絶食以後）壕の中では小便は一滴も出ませんでした。排尿する水分がなかったのですね。右足の太腿骨は五、六センチ突き出ていました。肉は縮んで腐っていてウジがたかっていました。米兵が私に煙草をさし出しましたが、私は首を振りました。すると鉄兜に水を汲んで来て飲ませてくれました。

それから後の下の方へ運ばれました。小学校の前の広場でしたが、そこは仮捕虜収容所になっていて、数百人の避難民が集まっていた。「こんなに沢山の人が生きていたんだなあ」私は驚きました。そこではじめて小さい空缶に何かを混ぜた飯を与えられたのですが、食欲はありながら、半分ほどしか食べられませんでした。

その翌日、中部の水釜まで、トラックで運ばれました。そこにある米海軍病院に入れられ、その翌日、足を手術しました。全身麻酔をし

ての手術で、何も判らず、そのまま翌朝まで眠っていました。

その朝、麻酔が切れて傷口が傷みはじめた頃、水釜（旧北谷村）の海岸からタンカで水陸両用車に運ばれ、沖に停泊している輸送船に乗せられハワイに送られることになったのです。私は水陸両用車が走っているとき、横になったままで沖縄島を眺めてたのですが、島全体が真っ白でしたなあ。緑は一色もなく、中部から島尻にかけて、ちょうど石粉山みたいに真っ白になっていましたなあ。

出典：『沖縄県史』第9巻 各論編8 沖縄戦記録1 琉球政府編（1971）

より転載

出典：『宜野湾市民が綴る戦争体験 戦禍と飢え』

宜野湾がじゅまる会（1979）